

一九九八年度国文学会彙報

一九九八年度国文学会活動状況

△新人生歓迎会▽ 四月七日 田辺学舎紫苑館 学生部会主催

△国文学会総会、研究発表会▽ 六月一四日 寧靜館会議室

・総会

・研究発表会

「伽婢子」と「剪燈新話」

——「真紅繫帯」と「金鳳釵記」の場合——

高野昌彦（本学大学院博士課程前期課程）

「断つべきは筆なのか？」——筒井康隆などの作品を教材に——

青木隆之（奈良育英高等学校教諭）

「能・歌舞伎・京劇」

向井芳樹（本学教授）

邱 玲（本学客員研究員）

△講演会等▽。一〇月一四日 寧靜館会議室 院生部会・学生共催

小川国夫氏（作家）を囲む

。一月一四日 田辺校地香栢館会議室 院生部会主催

森重 敏先生（奈良女子大学名誉教授）を囲む

。二月二日 弘風館25番教室 学生部会主催

松本 修氏講演会 「アホとバカの境界線はどこか？」

——全国アホ・バカ方言の研究——

△同志社国文学▽

第四九号 一九九九年一月二〇日発行

第五〇号 一九九九年三月二〇日発行

△国文学会会報▽ 第二六号 一九九九年三月二〇日発行

一九九八年度修士論文題目

『萬葉集』卷十三の考察

——異伝・注記を有する歌群を中心に——

垣見 修 司

人麻呂関係における正訓字の選択

——「河」「川」字の表記について——

倉 橋 厚 子

延慶本『平家物語』における源頼朝像

——武士という一側面を中心として——

戸 崎 志 峰

『建礼門院右京大夫集』にみられる資盛追慕について

——自然詠を中心として——

山 内 ゆ か

『詠歌一鉢』研究

『伽婢子』論

藤 原 麻 弥 子

——「恋愛譚」を中心に——

高 野 昌 彦

タイ・日現代の小説に描かれた女の生涯の比較研究

——『王朝四代記』と『紀ノ川』の場合——

ナルモン・ウタンクン

共同体成立の条件としての美と詩

——保田與重郎を視座として——

植山 みどり

遠藤周作『深い河』

——フェミニズムの視点から——

荒井 英恵

『今昔物語集』の連帯修飾

——句の纏まりからみた——

真仁田 栄治

現行辞典類における形容詞の意味記述について

佐尾 知登世

オノマトベについての日中対照研究

——形態と文法機能を中心に——

灰 焱

能の詞章と「掛詞」

——世阿弥の作品を中心に——

林 了子

一九九八年度卒業論文題目

『萬葉集』における長歌形式の定着

谷野 恵理子

万葉集羈旅歌の世界

辻井 里奈

『萬葉集』の歌における「死」を表す表現

高稿 理香

『萬葉集』における短歌四首の構造について

津守 香里

柿本人麻呂作歌における「日之皇子」の形象

横山 千鶴子

『萬葉集』における「形見」について
遊行女婦とその作歌

林 亜紀

萬葉集における古歌の誦詠について

河村 久美子

『源氏物語』「嵯峨野」考

西田 大介

今昔物語集卷十一における編集意図

今 一己

靈異記中卷第三十三縁のモチーフ

今井 美穂子

歌合判詞における「本歌の心」

稲田 かずは

祇王説話

景井 詳雅

平家物語における美の表現

唐津 利典

中世軍記物語における馬

長田 知子

徒然草における兼好の宗教

清水 英晶

作者藤原定家への一試論

須藤 光輝

平家物語における斎藤別当実盛

竹下 香織

平家物語における祇王

手塚 康太

宇治拾遺における源光伝説

内山 みな美

古事談 浦島子伝考

細川 麻紀

靈異記 道場法師考

石上 大祐

今昔物語 卷三十一 第三十三

石川 直美

今昔物語 在原業平

石崎 美穂子

今昔物語における源頼光

木村 友美

宇治拾遺 伴善男考

靈異記における蟹報恩

古事談 白河天皇伝説

今昔物語集 伯奇考

『金々先生栄花夢』における挿絵と本文

【誹風柳多留】

中国笑話と日本笑話

安楽庵策伝

不易流行論

西鶴諸国ばなし

西鶴諸国ばなし

白峯

蛇性の姪

忠臣蔵論争

忠臣蔵と実説

歌舞伎の観客

曾根崎心中

堀川波鼓

井筒 夢幻能

謡曲（源氏物）

宮崎 修一

大久保 仁士

辻 優子

脇田 加奈子

荒井 智美

石黒 智哉

兒玉 都

高谷 直也

精山 貴力

井上 摩都子

西田 彩子

北村 直子

藤城 有起

葛原 知子

前田 博幸

前田 有規子

二宮 信世

嶋野 由紀子

松田 夕佳

高見 志保

寺山修司「田園に死す」

スポーツノンフィクション

「菊花の約」における信義

女殺油地獄におけるお吉殺し

梶井基次郎の「歩く」について

【ジャズ】と【物語】

安岡章太郎「海辺の光景」における母親の女性性

遠藤周作の描いた神

転移する記憶／散種される記憶

揺らぐ女性像

——【処女懐胎】試論——

岡田淳作品にみるファンタジー児童文学

岡本かの子と女性解放運動

火野葦平 河童曼陀羅

【鏡子の家】論

第七官界彷徨と映画

島田雅彦の文学

ナオミを通して見る女性像

戦時下の太宰治

——【お伽草子】を起点として——

齋藤 甲次郎

河口 惣亮

高石 寛子

植田 陽介

今須 恵理子

風間 雄介

久保田 啓子

増井 加奈子

西村 将洋

野村 尚子

田内 雅人

山本 聖子

山本 志保

柳川 朋美

横木 美穂子

土手 みさこ

福井 久美子

野本 壮一郎

『お富の貞操』における貞操観

井上靖 「あした来る人」論

『深い河』における「インド」について

倉橋由美子 『夢の浮橋』論

宮本輝論

——物語の様相とその変容——

宮沢賢治の童話に見られる西洋的要素

『兎の目』と『太陽の子』の中の「感動」

『さようなら、ギャングたち』に見る言葉の可能性

柳美里論

自動化作用からの逸脱への指向

円地文子 『女坂』成立考

〈苦しみ〉の系譜

——芥川龍之介「羅生門」成立の一考察——

志賀直哉の小説「范の犯罪」論

想像の大和路を行く旅人たち

——堀辰雄の「大和路」と観光について——

吉川英治と時局性

太宰治 『新釈諸国断』考

『金閣寺』作品論

澤田綾子

澤田沙恵

島田健一郎

滝澤佳子

富岡千浩

山口美香

山本都

梁川賢志

吉田裕収

稲垣真人

吉野貴庸

細田敦喜

石井佑侍

熊谷昭宏

岡本大作

李美香

堀田克真

本格小説「眠狂四郎」を斬る

「螢川」にみられる宮本輝の思想

今昔物語集と宇治拾遺物語の直喩表現

広告文・新聞見出しの表現形態をめぐって

感動詞の歴史の変遷と位相

文学作品における間の効果について

冒頭部による小説の文体

井上靖の色彩語

歌謡曲にみる振仮名(ルビ)

『松浦宮物語』文体考

日本地名の研究

日本人の名前について

日本刀の刀身と拵えに関する語彙の検証

敬語観の歴史

抽象名詞における語種比率について

希用語について

類形字によって起こる誤読について

手紙において表現される敬意

「あて字」の特徴

——『坊っちゃん』のあて字調査を通して——

東香織

野口真紀

花野平祐

堀雄一郎

鹿野雅義

砂田奈穂

田中優子

船越千恵子

岸本達也

中井彩子

織田有洋子

杉村弘美

竹内志保

月田真由美

宇都宮広規

吉川玉緒

吉本悟史

安藤実香

須内直人

新聞に見られる現代のカタカナ語の状況 弘津 珠麻

吉本ばなの『キッチン』における人称代名詞および

人を指す名詞の調査と分析 木村 温子

ヘッドラインにおける変遷 青山 悠七子